

所属欲求が自己制御能力と拒絶反応性を介して不登校傾向に及ぼす影響

羅竹¹・堀川佑惟¹・岡隆²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：所属欲求，不登校傾向，自己制御能力

The effects of the need to belong on students' tendencies toward non-attendance through self-regulation and rejection sensitivity

Zhu LUO¹, Yui HORIKAWA¹ and Takashi OKA²

(¹Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon Univ., ²College of Humanities and Sciences, Nihon Univ.)

Key Words: the need to belong, students' tendencies toward non-attendance, self-regulation

目 的

大学生の不登校傾向を低減するため、大学生の不登校傾向に影響すると考えられる、自己制御能力の高さと拒絶反応性の低さに注目する。本研究では、それらの原因として考えられる所属欲求を扱う。所属欲求が満たされていない人ほど、自己制御能力が低いことが示されている(Baumeister et al., 2005)。また、所属欲求が高い人ほど、拒絶反応性が高いと考えられる(Tyler et al., 2016)。さらに、一時的・長期的所属欲求間の不一致は自己制御能力を低減させる(Lisjak et al., 2012; Baumeister, 1998)。そして、自己制御能力が低減すると配偶者や恋人の破壊的行動に対するネガティブな反応が増加することから(Finkel & Campbell, 2001)、大学で関わる他者の破壊的行動に対するネガティブな反応も、自己制御能力の低減により増加すると推測される。

研究1では、所属欲求の高さ、所属欲求の満たされなさが、自己制御能力の高さと拒絶反応性の低さを介し、不登校傾向に影響を及ぼすことを検証する。研究2では、長期的所属欲求の高さと一致しない高さの一時的所属欲求のプライミングが、自己制御能力の低減を介し、大学で関わる他者の破壊的行動に対するネガティブな反応を増加させることを検証する。

研究1 方法

質問紙調査に大学生225名が参加した。質問紙は5つの尺度で構成された。(1)成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版(山形他, 2005)：35項目4段階評定。自己制御能力の指標とした。(2)所属欲求尺度(小林他, 2006)：10項目5段階評定。所属欲求の高さの指標とした。(3)孤独感尺度(諸井, 1992)：20項目4段階評定。所属欲求の満たされなさの指標とした。(4)日本語版拒否に対する感受性尺度(本多・桜井, 2000)：18項目6段階評定。拒絶反応性の指標とした。(5)大学生不登校傾向尺度(堀井, 2015)：12項目7段階評定。

研究1 結果と考察

パス解析を行った結果(Figure 1)、所属欲求の高さ、所属欲求の満たされなさから自己制御能力へは有意な負のパスが、拒絶反応性へは有意な正のパスが見られた。拒絶反応性から自己制御能力へは有意な負のパスが見られた。自己制御能力、拒絶反応性から不登校傾向へは負のパスが見られた。

予測通り、所属欲求が高い場合や満たされていない場合に、自己制御能力の低減を介し、大学生の不登校傾向が増加することが示された。一方、予測に反して、所属欲求が高い場合や満たされていない場合に、拒絶反応性の増加を介し、不登校傾向が低減することが示された。また、所属欲求の満たさ

れなさが不登校傾向に直接的に正の影響を与える傾向も示された。これらの点に関する検討は将来の課題である。

研究2 方法

2(長期的所属欲求の高さ：低対高)×3(一時的所属欲求のプライム：低対高対なし)の参加者間計画の実験を行った。実験参加者の大学生55名のうち、22名(男性10名)は低一時的所属欲求条件、24名(男性13名)は高一時的所属欲求条件、9名(男性4名)はプライムなし条件にそれぞれ割り当てられた。1回の実験につき1-8人が参加した。

所属欲求尺度(小林他, 2006)への回答後に、プライミング課題が行われた。低一時的所属欲求条件の参加者は、「一人または何人かの人と繋がっていないと感じており、しかもその関係から離れたいと感じていた時期」について、高一時的所属欲求条件の参加者は「一人または何人かの人と親しい繋がりを感じており、その関係について快く感じていた時期」について、プライムなし条件の参加者は「昨日したこと」についての書き出しを5分間行った。その後、大学で関わる他者の破壊的行動に対する反応を測定する、寛容性尺度への回答を求めた。この寛容性尺度は、Finkel & Campbell (2001)を参考に作成された、大学で関わる他者の破壊的行動に対する、忠誠、対話、無視、離脱の4つの反応をそれぞれ9段階で評価するものである。最後に、認知資源を測定するため、3分間二桁算数式にできるだけ早く正確に回答するように求めた。

研究2 結果と考察

所属欲求尺度得点の中央値を基準に、参加者を長期的所属欲求の低群($n=28$, $M=23.29$, $SD=4.41$)と高群($n=27$, $M=35.48$, $SD=4.13$)に分けた。寛容性得点およびその下位尺度得点と算数得点を目的変数とした、2×3の参加者間分散分析の結果、寛容性の下位尺度である対話反応得点については長期的所属欲求の主効果が有意であった($F=4.50$, $p<.05$)ものの、他の全ての目的変数については主効果($F<2.54$, $n.s.$)、交互作用($F<1.22$, $n.s.$)は有意ではなかった。

長期的所属欲求が高いほど、対人関係を改善する反応である対話反応が高いことが先行研究でも示されている(Barnes et al., 2010)。この結果は、所属欲求が高い人ほど対人関係を維持すること(Baumeister & Leary, 1995)によって説明できよう。この結果から、所属欲求の高さが対話反応を介して不登校傾向に負の影響を与えることが推察される。

総合考察

所属欲求が満たされないほど、大学生の不登校傾向が増加する可能性が示された。このことから、不登校傾向を有する大学生の所属欲求を充足する援助行動により、不登校傾向が低減するであろうと考えられる。所属欲求の高さが不登校傾向に影響を与えることについて本研究では一貫した結果が得られなかったため、今後も検討を要する。

主要引用文献

Baumeister et al. (2005). *JPSP*, 88, 589-604./ Finkel & Campbell (2001). *JPSP*, 81, 263-277./ Lisjak, et al. (2012). *JPSP*, 102, 889-909.

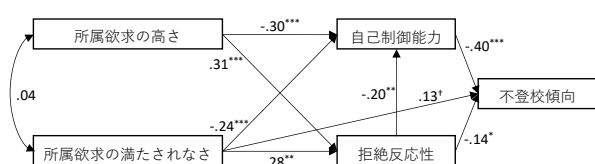


Figure 1. 不登校傾向を規定する諸要因のパス図

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$. $\chi^2=286$, $df=1$, $p=.593$, SRMR=.008, GFI=.999, AGFI=.992, RMSEA=.000.